

兵庫県信用漁業協同組合連合会

通常総会

昭和六十年年度末

漁協貯金残高 四六四億一千万円 信漁連貯金残高 三六二億七千万円



利政策の展開が予想され、金融自由化の動きとしては、昨年十月に「大口定期預貯金」が創設され、また、金融問題研究会において小口預貯金金利自由化の検討が引続き行われております。

漁業界にあっても全県の主要漁船漁業の漁獲不振に加え、瀬戸内海ののり養殖漁業が販売価格の低落を蒙る等漁業経営は依然として苦しい状況が続いております。

本県信用事業における貯蓄推進運動は、このように経済金融環境、漁業経営実態を反映して例年になく苦しい推進を余儀なくされ、系統一丸となつて貯蓄運動を推進したものの、今一步のところで目標未達成となりまして、全国的に伸び率四・三％が全国平均の伸び率四・一％を上回っております、この成果は高く評価されることと存じます。

また、漁業経営面では、漁業者の負債超過とそれに起因する漁協財務内容の悪化が、いよいよ顕在してきたことから、これらの整理を積極的に進めるとも

今後、県、農林中金ならびに系統諸団体の協力、支援を得ながら、漁協・信漁連一体となつて機能の総力を挙げ運動推進に邁進する所存であります。

本年度を一年延長して昭和六十二年度末とし、本年度から本格的実施される「漁協信用事業整備強化事業」を軸とした「漁協信用事業強化運動」を引き続き強力に展開することによって、漁協の体制面・機能面の強化、財務内容の改善等を図るとも推進の方策の見直し等実効性を高め、本年度漁協貯蓄目標額四八三億円(前年比伸び率四・一％)の必達を期す所存であります。

★重点目標
①系統集中率七〇％以上を確保する。

兵庫県漁業共済組合通常総会 契約総額 一一六億五千万円、全国中7位の実績

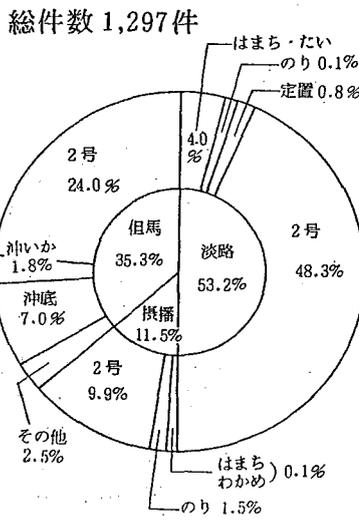
新たな「ぎよさい総加入運動の推進」と「漁協共済の飛躍的拡大」へ

支共共済金は三億四、四八七万円となり、掛金の一・三三三倍の支払いとなり、事業部門では支払い超過でしたが、管理部門でまかなひ、二千七百万円余の黒字を計上、すべて法定の定める準備金に積み立て、事業の健全化に当りました。

総会提出議案は満場一致で可決され、役員改選が行われ、次のとおり決定されました。

- 組合長理事 西上重式
- 副組合長理事 榎本実
- 専務理事 岸 峯夫
- 理事 塩谷保夫
- 理事 炭谷恒男
- 理事 橋本正三
- 理事 濱野正巳

契約件数の地区別割合



60年度実績の地区別契約金額の割合

総額 116億5,724万円

地区	金額	割合
但馬地区	69億4,786万円	59.6%
淡路地区	40億1,985万円	34.9%
播磨地区	6億3,953万円	5.5%

地区	契約種別	金額	割合
但馬地区	3号	37.9%	50.0%
	沖いか	3.6%	6.3%
淡路地区	2号	9.5%	28.9%
	養殖	5.2%	15.7%
播磨地区	2号	2.3%	36.4%
	養殖	4.0%	62.6%

番組のお知らせ

こちら海です (放送予定)
毎週日曜日、正午より
サンTVで放送中
6月15日 京都市・福井県小浜市
6月22日 兵庫県三木市 郡浜坂町

これが現代という飾り道である。今回は飾り道のルールをさぐり若狭と京を結んだ味の道を紹介いたします。

6月29日 和歌山県有田川・吉備町・金屋町

これは海の子釜屋の子尾崎辰吾君は釜屋で生まれ育って四才になった。有田川、県無形文化財の徒歩漁法でのう釣りに始まり、漁師のおじいさん、おとうさんと海の鮭を京都へ運送道。

ますので、よろしくご支援、ご協力をお願いいたします。

(1) 全国的に展開される「ぎよさい総加入運動」に運動し、推進会議、座談会等を開催、漁協組織と一体となつた普及推進を行います。

(2) 中期実行計画の最終年に当たりますので、とくに未加入の漁協に特段のご協力をいただき加入の達成を図ります。

なお、計画の詳細は、推進会議等でご説明、お問い合わせを行うことにより強行に推進を行います。

水試ノート

昭和61年のイカナゴ漁況について

本年のイカナゴ漁は5月上半旬にほぼ終了したが、一部ではエサ用の漁が続いています。今年はずっと比早目の網あがりとなった地区が多かったようです。これは漁期後半の漁獲量が悪くエサ用の出漁を取りやめたことや、チリメンの出漁がやや早くこれに回ったことなどによるものと思われまます。また正確な統計数字を把握しておりませんが、漁獲量は各地区とも昨年を下回ったようで、悪かった地区では昨年の50%、良かった地区でも昨年の80%止まりといたところと見えます。全般的に見ると昨年より割程度の地区が多いようです。また、大阪湾よりも播磨灘側の不漁のほうが目立ちました。金額面では魚価がまずまずであったため、その落ち込みは漁獲量ほど大きくはななく、地区によっては昨年並を維持したところもありました。

播磨灘の網おろしは3月1日でしたが、初漁期は魚体がかなり小さく、また漁も少なかつたため、一部地区では出漁を見合せたところもありました。漁期間を通じて魚体は小さかったのですが、魚体のばらつきは大阪湾に較べて少ないようでした。今年この播磨灘戸での稚魚の発生量は昨年と比較して、南部の鳴門海峡周辺に漁場がほとんど形成されたのも特徴の一つでした。一方大阪湾の方は、初漁期は好調で、好漁であった昨年並の漁も期待されたのですが、3月下旬以後漁獲量が伸びず、そのまま終漁に至ったようです(図1)。

表1 イカナゴ稚魚の分布量(2月) プラントネット1隻当りの採集尾数

年度	大阪湾	播磨灘
48	6.8	104.1
49	12.8	21.8
50	14.3	24.9
51	14.3	24.9
52	3.5	17.6
53	34.1	9.4
54	26.6	14.9
55	26.4	6.5
56	21.6	49.9
57	13.1	43.3
58	3.8	12.6
59	8.3	9.6
60	135.7	50.0
61	97.6	36.6

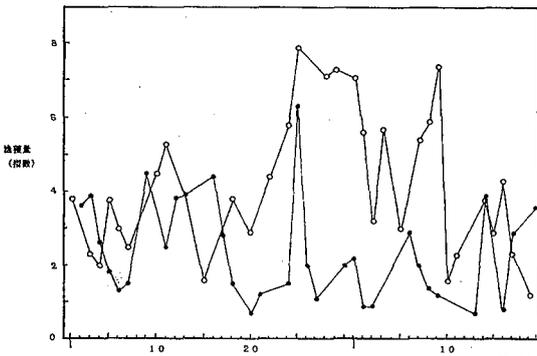


図1 イカナゴ漁獲量の日変化(淡路町)

魚の発生量は昨年と比較して、南部の鳴門海峡周辺に漁場がほとんど形成されたのも特徴の一つでした。一方大阪湾の方は、初漁期は好調で、好漁であった昨年並の漁も期待されたのですが、3月下旬以後漁獲量が伸びず、そのまま終漁に至ったようです(図1)。

う少し早く入ってれば、予測の下方修正ができたかも知れません。特に播磨灘では備前瀬戸からの添加群に依存する割合が高いため、来期の予測にあたってはこの点を十分考慮し、ゆきたいと考えております。

5月の海況と漁況(兵庫県立)

1、海況 (明石海峡周辺) 旬平均水温は上旬13.9℃、中旬15.5℃、下旬16.5℃を示しており、平年に較べて0.5℃程度低目に経過した。(大阪湾・紀伊水道) 5月21日の調査結果によると大阪湾の表層水温は15.6℃、16.4℃の範囲にあり、平年に較べてやや低目であった。一方紀伊水道の表層水温は大阪湾に較べて(小型底曳網)播磨灘

2、漁況 (兵庫県立) 東部・大阪湾北西部を主漁場とする小型底曳網では主にカレイ類(メイタガレイ・マコガレイ)・エビ類・マダコなどが漁獲されている。これらうちカレイ類は前年の1.5倍、エビ類は前年の1.5倍、マダコは前年の1.5倍を示している。またエビ類(主にサルエビ)も前年同様に多い。明石海峡周辺の香智網によるマダイ漁は近年増加傾向をみせており本年も現在のところ好漁の模様である。(一本釣) 沼島を除く各地区ともサワラ漁が主体。明石浦では昨年より5日遅れの5月2日にサワラ漁が始った。初漁一週間程度は好漁を示している。香智網のサワラ漁は昨年同様、この数年続いている好漁が持続する気配をみせている。シラスの魚種組成は5月8日のサワラ59%、カタクチシラス5%、カタクチシラス5%、カタクチシラス5%、カタクチシラス5%の割合で、5月15日ではシラス63%、カタクチシラス37%の割合となっていたが、5月下旬にはほぼ100%カタクチシラスに変わった。

主漁場:紀伊水道北部		調査地:沼島		主漁場:大阪湾北西部および播磨灘東部		調査地:明石浦	
漁業種別	漁獲量(kg)	漁獲量(kg)	前年比	キロ単価(円)	備考	漁業種別	漁獲量(kg)
小型底曳網	43	サルエビ	15-20	1,800		小型底曳網	45
		小エビ	5-10	700			
		アナゴ	5-10	700			
		シャコ	5-10	250			
		キス	5-6	1,000			
		ハリイカ	2-3	1,000			
		ヒイカ	2	300			
		テナガダコ	10-20	250			
		クロダイ	15-30	700			
		マダイ	4-5	1,500-2,700			
一本釣	3	マアジ	5-10	1,300			
		サバ	50-100	200			
		マルアジ	5	900			
		サゴシ	2-3	500			
		エソ	50-150	80			
		マダコ	10-20	700-1,100			
延縄	5	ハモ	10	3,700-4,000			
刺網	15	ハリイカ	2-5	1,100			
		クロダイ	5	900			
		マダコ	3-5	1,000			
		ヒラメ	2-3	2,000-3,500			
		メイタガレイ	2-3	2,000			
		サザエ	10-20	1,050			
		カサゴ	5	500-1,000			

主漁場:明石浦		調査地:沼島		主漁場:大阪湾北西部		調査地:淡路町	
漁業種別	漁獲量(kg)	漁獲量(kg)	前年比	キロ単価(円)	備考	漁業種別	漁獲量(kg)
小型底曳網	11	ヨシエビ	5	4,000	入び滑	小型底曳網	32
		サルエビ	2	2,000			
		中	3	1,000			
		小	5	300			
		ガザミ	1	1,200-3,000			
		アカシタ	6	1,000-2,000			
		その他	13	800			
		オコゼ	2	4,100	滑網		
		マダコ	8	915			
		アカエイ	15	200			
		メイタガレイ	10	1,000-3,000			
		ウシノシタ	4	2,500			
		アイナメ	4	2,300			
		ヒラメ	5	2,500			
一本釣	70	サワラ	40	500-800			
		カサゴ	8	1,300			
		マダコ	12	915			
撒き網	5	小タイ	150	6.0	1,800		
		セイゴ	10	1,300			
延縄	20	アナゴ	100	950			
		ハモ	30	3,630			
刺網	12	ハリイカ	1	1,000			
		クロダイ	2	850			
		マダコ	6	815			

漁況の特徴:撒き網による小タイは前年に較べてかなり多い。

主漁場:淡路町		調査地:淡路町		主漁場:大阪湾北西部		調査地:淡路町	
漁業種別	漁獲量(kg)	漁獲量(kg)	前年比	キロ単価(円)	備考	漁業種別	漁獲量(kg)
小型底曳網	20	シラス	750-1,250	0.8	120-720	小型底曳網	20
		タイ	2-3	4,500-5,500			
		スズキ	5-15	2,100-2,300			
		アナゴ	5-10	1,200-1,500			
		マナガツオ	5-15	1,500-1,700			
		タイ	3-8	4,500-5,500			
		スズキ	2-3	2,100-2,300			
一本釣	30	スズキ	2-3	2,600-2,700			
		セイゴ	1-2	1,900-2,000			
		アイナメ	1-2	2,500-2,700			
		メバル	1-2	2,400-2,600			
		カサゴ	1-2	2,300-2,800			
		サワラ	10-20	700-800			
		サゴシ	5-15	500-600			
延縄	6	アナゴ	20-70	1.1	1,800-2,000		
		小	20-40	1.2	500-600		
		マコガレイ	10-20	2.0	3,300-3,700		
		スズキ	20-30	2.0	2,400-2,600		
刺網	8	スズキ	2-3	0.7	2,000-2,300		
		アイナメ	1-3	0.5	2,300-2,400		
		タナゴ	5-10	1,200-1,300			
タコ巻	2	タコ	20-40	1.0	1,700-1,800		

漁況の特徴:船曳網によるシラスは昨年と同様好漁に推移している。3月上旬にはほとんどマイワシシラスであったが、下旬にはほぼ100%カタクチシラスに変わった。

3、今年シラス漁の見通し

5月26日に瀬戸内海東部の各府県水試担当者が集まり、カタクチイワシの予報会議が開かれました。それにより、夏漁(6月8日)は前年並かやや下回る漁、秋漁(9月12日)はほぼ前年並の漁と予報されています。シラス漁は昭和58年以後好漁が続いていますが、今年も期待できそうです。

本年度のノリ養殖経過と問題点

生産者の皆さんは、今頃、厳しかった本年度のノリ養殖を振り返すべく、気分を新たに次年度の準備を進めておられることとしよう。これから反省会や協議会が開催され、次年度の対策が検討されると思います。このための参考になればと願い、本年度のノリ養殖経過と問題点、およびその対策などについて述べたいと思います。

気、海象の経過

本年度養殖期間中に現日数は図2のとおり、十二、二月がほぼ平年並、三月は少ない傾向であった。

米養殖内の無機三態窒素(播種後15日平均)は、十月には平年より高めを示したが、十一月に三・五ppm以下まで急激に低下し、十一月に再び平年値まで増加した。しかし、二月には五・五ppm以下まで急激に減少した。

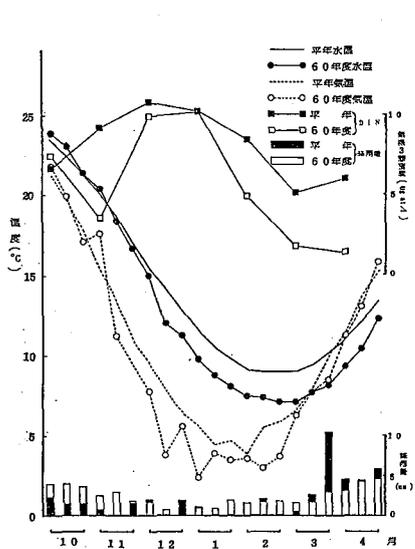


図1 ノリ養殖期間中の主な気・海象変化

年度	生産者数	播種数	1人当り播種数	持網数	持網比	平均移殖率	生産枚数	単価	生産枚数
53	93	88	95	87	46	54	88	112	112
54	99	100	101	101	50	50	111	110	110
55	103	105	102	112	52	48	102	96	95
56	105	106	101	107	60	40	101	95	95
57	101	101	100	105	62	38	89	87	87
58	98	98	100	100	60	40	140	142	142
59	95	98	104	98	63	37	105	107	107
60	82	95	104	91	76	26	114	120	120

注) 5年間(53~57年度)の平均を100とする指数を示す。ただし、持網比率は各年度の持網数に対する比率。

表1 53年度から60年度までのノリ養殖動向

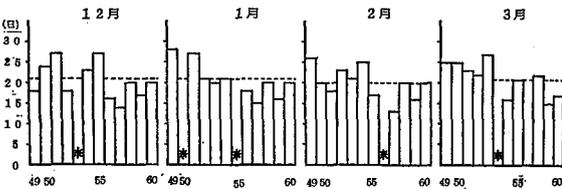


図2 風速5m以上の出現日数比較 (平年: 昭和49~57年度分の平均、※印は欠測)

芽が脱落する状態が観察された。

なお、淡路南浦地区は十月十五日頃から採苗を開始したが、以降の生長は順調で、十一月二十日までで大部分の網が入庫された。

本張状況
本張は西播地区で十一月一日から、東播地区で十一月十三日、十五日から、淡路西浦と東浦地区は十一月十六日から開始された。

西播地区は、本張直後の十一月月上旬に液胞増大や色素体収縮などの細胞異常、また、付着珪藻に被われるなどの芽の弱体化が認められ、一部の網では葉体の流失が観察された。

なお、十一月月中旬以降から上記の症状は回復し、一月まで順調な摘採が続いた。二月以降は栄養塩の低下による色素現象が続き、生産制限を行いつながら三月

5m/秒以上の風力出現日数は図2のとおり、十二、二月がほぼ平年並、三月は少ない傾向であった。

米養殖内の無機三態窒素(播種後15日平均)は、十月には平年より高めを示したが、十一月に三・五ppm以下まで急激に低下し、十一月に再び平年値まで増加した。しかし、二月には五・五ppm以下まで急激に減少した。

養殖経過
降雨量は十一月まで平年より少なかったが、三、四月にまとまって認められた。

主な生産期の月別の西播、淡路西浦地区では十月一日から、東播、淡路東浦地区では十月五日前後から採苗

上旬までに終漁した。

東播、淡路西、東浦地区では、十一月中旬に一時西播地区と同様の芽の弱体化の傾向が観察されたが、以後、回復した。順調な摘採が続いた。病気が上しては、十二月下旬に各漁場でアカガサレ病斑が拡大したが、被害はほとんど認められなかった。

また、東浦地区の一部漁場ではシログサレ症候が拡大し前期生産に被害が認められたが、一月以降は次第に回復した。

なお、各地区とも二月に入っても生長や色素の弱体化が認められたため、二月中、下旬に網張替を行うという例年にならぬ状況があった。しかし、二月の張替網は生長が劣り、色調もやや赤目になるなど、不調なものが多かったが、一月に張替えた網は比較的順調な

生長が続いた。四月に入り、栄養塩の減少による品質の低下に、生産単価の大幅な低下が示したが、やはり生産単価が低下したため、例年より早い四月月中旬までに終漁した。

淡路南浦地区は、他地区より遅れて十二月下旬から本格的な生産を開始したが、以後、三月月上旬まで順調な摘採を続けた。三月中旬の張替網も順調な生長を示したが、やはり生産単価が低下したため、例年より早い四月月中旬までに終漁した。

本年度の生産は図3に示すとおり、生産枚数は平年より多かったが、単価が大幅に低下したため生産金額ではほぼ平年に終わった。

次に、五八・六〇年度の三年間の月別生産枚数を、五三・五七年度の平均と比較したものは、図4に示すとおりである。本年度は、五八、五九年度と同様に、一月の生産が高かった他に、二月の生産が非常に高く、四月の生産が大幅に減少するなどの大きな相違がみられた。これは、前に述べたとおり秋芽網の生産が二月まで順調であったこと、および四月の生産が比較的早期に終漁したことが主な要因と考えられた。

これより、本県のノリ養殖規模は、生産者の減少している割合に比べ、播種数はそれほど減少せず、一人当りの冊数が徐々に増加している。また、播種当り生産枚数の増加により、生産枚数と一人当り生産枚数が増加している。一方、持網数は減少しているが、逆に地網の比率は七五%まで向上し、ほぼ完全に地網中心の養殖方法に変わった事を示すなど各生産者の技術向上と健全経営を指向する努力がうかがわれる。

養殖規模の傾向
五三年度~五七年度までの五年間の平均を基準にして、六〇年度のノリ養殖規模を比較した結果は、表1のとおりである。

この要望が強い。しかし、これには病害の早期対策を第一に、また、気象の予測が必要であるため、事前に十分協議し、対処する必要がある。対策の第一歩となることである。

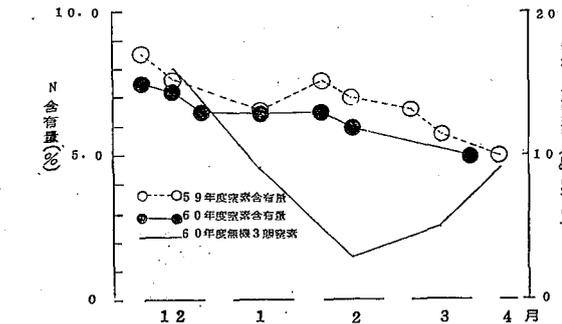


図5 59、60年度ノリ葉体中の窒素含有量の時期別変化(阴石地区)

以上の本年度養殖経過から、問題となる点を抽出すると、まず、育苗後期および本張前期のシログサレ症状が

上げられる。これは、今後の地網を中心とした生産体制を推進する上で大きな障害となる可能性がある。後期生産の評価も、後期生産の重要な対策となることである。

他県に比較して一人当りの冊数が少ないが、漁場を十分活用している本県では、生産コストをできるだけ下げるよう努力すると共に、以上の例のような細かい管理を徹底して実施し生産単価を上げる方向に進む必要がある。

下させる一原因になったと考えられた。この対策として水温10℃以下を示す一月中に網張替えを一齐に行い、製品の品質統一をはかる。後期生産の評価も、後期生産の重要な対策となることである。

他県に比較して一人当りの冊数が少ないが、漁場を十分活用している本県では、生産コストをできるだけ下げるよう努力すると共に、以上の例のような細かい管理を徹底して実施し生産単価を上げる方向に進む必要がある。

この対策を第一に、また、気象の予測が必要であるため、事前に十分協議し、対処する必要がある。対策の第一歩となることである。

